

平成27年産水稻の収穫量（熊本）

水稻の10 a 当たり収量は500kg（作況指数97）

収穫量（子実用）は17万800 t

【調査結果の概要】

熊本県における平成27年産水稻の作柄は、生育全般での日照不足等の影響による生育の遅れ、いもち病及び台風第15号の通過に伴うもみずれや葉ずれ等の被害により、10 a 当たり収量は平年を下回る500kg（前年産並み）、収穫量（子実用）は17万8,000 t となりました。

また、主食用作付面積に10 a 当たり収量を乗じた収穫量（主食用）は17万1,500t（前年産に比べ9,000 t 減少）となりました。

表1 平成27年産水陸稲の収穫

区 分	作付面積 (ha)	10a当たり 収量 (kg)	10a当たり 平年収量 (kg)	作況指数	子実用収穫量 (t)
水 陸 稲 計	35,600	500	515	97	178,000
水 稲	35,600	500	515	97	178,000
陸 稲	0	143	－	－	1

表2 水陸稲の作付面積、10a当たり収量及び収穫量の推移

年 産	作付面積 (ha)	10a当たり 収量 (kg)	10a当たり 平年収量 (kg)	作況指数	収穫量 (t)
27年	35,600	500	515	97	178,000
26年	37,500	500	515	97	187,500
25年	38,400	502	515	97	192,800
24年	38,100	501	515	97	190,900
23年	37,900	519	515	101	193,600
22年	39,500	512	515	99	202,200
21年	39,700	515	515	100	204,500
20年	39,700	522	515	101	207,200
19年	41,000	513	515	100	210,300
18年	42,000	440	515	85	184,800
17年	42,700	479	515	93	204,100
16年	42,300	396	512	77	167,500
15年	40,900	491		96	200,400
14年	41,900	523		103	219,200
13年	42,800	522		103	223,000
12年	44,000	517		102	227,600
11年	45,000	407		81	182,800
10年	45,300	515		104	232,900

【調査結果】

1 水稻の生育概況

熊本県における平成27年産水稻の作柄は、生育期間が低温・日照不足で推移したため、穂数が平年に比べ少なく、全もみ数は1穂当たりもみ数が補償作用で多かったことから、平年並みになりましたが、登熟が低温・日照不足による生育の遅れ、いもち病及び台風第15号の通過に伴うもみずれや葉ずれ等の被害によりやや不良となったため、10a当たり収量は平年を下回る500kg（作況指数97%）となりました。

2 作柄概況

(1) 県北地帯

全もみ数は、穂数が「少ない」となり、その補償作用で1穂当たりもみ数が「やや多い」となったことから「やや少ない」となりました。

登熟は、低温・日照不足による生育の遅れや台風第15号のもみずれ・葉ずれ等の影響があったものの、9月中旬以降天候が回復したことにより「平年並み」となりました。

このことから、10a当たり収量は平年を下回る519kg（作況指数は、作柄の悪かった前年産に比べ9kg増加の98%）となりました。

(2) 阿蘇地帯

全もみ数は、穂数が「平年並み」となり、1穂当たりもみ数が「やや多い」となったことから「やや多い」となりました。

登熟は、5月早植えのコシヒカリについては、8月中旬～9月上旬の日照不足による粒の肥大不足、その他の品種（あきげしき、ヒノヒカリ）については、8月中旬～9月上旬までの日照不足と合わせて、穂いもちの拡大及び台風第15号によるもみずれ等の発生により「不良」となりました。

このことから、10a当たり収量は平年を下回る486kg（作況指数94%）となりました。

(3) 県南地帯

全もみ数は、穂数が「少ない」となり、その補償作用で1穂当たりもみ数が「多い」となったことから「平年並み」となりました。

登熟は、台風第15号の通過に伴い、早植えのキヌヒカリの倒伏及び普通期のヒノヒカリ等でもみずれ等の発生により不稔粒が増加したことと合わせて、8月中旬～9月上旬の日照不足、穂いもちの拡大により「やや不良」となりました。

このことから、10a当たり収量は平年を下回る488kg（作況指数96%）となりました。

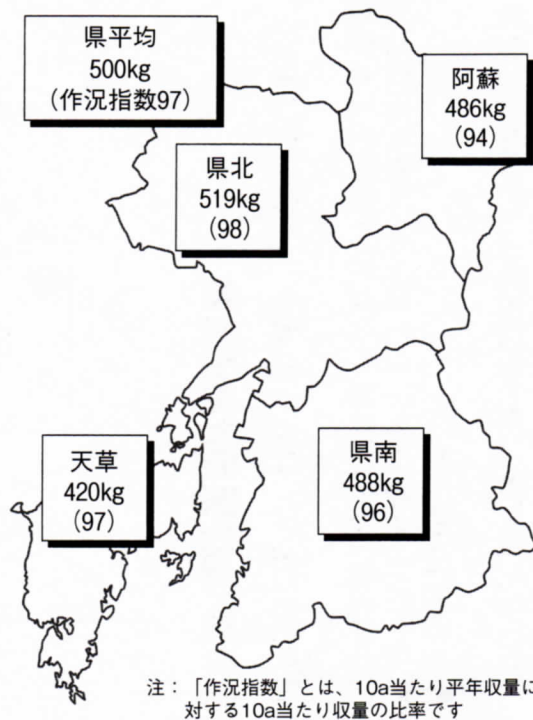
(4) 天草地帯

全もみ数は、穂数は「少ない」となり、その補償作用で1穂当たりもみ数が「やや多い」となったことから「やや少ない」となりました。

登熟は、早期水稻が平年並みとなったこと、普通期は台風第15号のもみずれ・葉ずれ等の影響があったものの、9月中旬以降天候が回復したことにより全体では「平年並み」となりました。

このことから、10a当たり収量は平年を下回る420kg（作況指数97%）となりました。

図 水稻の作柄表示地帯別10a当たり収量



3 収穫量

収穫量（子実用）は17万8,000tで前年産に比べ9,500tの減少となりました。

また、主食用作付面積に10a当たり収量を乗じた収穫量（主食用）は、17万1,500tで前年産に比べ9,000tの減少となりました。

4 被害状況

気象被害は、低温・日照不足による生育被害（分げつの抑制）及び台風第15号によるもみずれ・葉ずれ等がみられました。

病害では、8月中旬～9月上旬の低温・日照不足により穂いもちが拡大し、特に中山間地を中心に、いもち病の被害が平年に比べ多くなりました。

虫害等ではスクミリンゴガイの発生が平年に比べ多くなったものの、トビイロウンカについては平年より少ない発生となり、総じて被害は少なくなりました。

なお、中山間地域ではイノシシによる被害が平年より多く発生しました。

総体的に被害は「やや多い」となりました。

【調査結果の概要】

平成27年産水稻作付面積（主食用）は140.6万haで、前年産に比べて6.8万haの減少（対前年比95.4%）となった。

全国の10a当たり収量は平年並みの531kg（作況指数100）となった。

これは、北海道及び東北では、全もみ数及び登熟がおおむね平年を上回った一方、関東以西では、全もみ数は地域によって差があったものの、8月中旬以降の日照不足や台風等の影響により登熟が総じて平年を下回ったためである。

この結果、収穫量（主食用）は744万トンで、前年産に比べて44万トンの減少（対前年比94.4%）となった。

平成27年産水稻の都道府県別作況指数

